

「ドウスル？」

坂口 裕靖

Amazon Echo は相変わらず車載で使っています。最近はずっと暖かい日が増えてきたため、ルーターが起動失敗する確率もめっきりさがり、問題なく使えるようになりました。とはいえ、せっかく「川越市新宿」が「かわごえしあらじゅく」と呼んでくれていたアレクサさんの辞書がいつの間にか書き換わっていて、「かわごえししんじゅく」に成り下がってしまい、ちょっと残念です。その意味では、つい数日前まで「メキシコの音楽かけて」と頼むと、「アマゾンミュージックよりメキシケンミュージックを再生します」とか言っていたのに、機能ぐらいいから「メキシカンミュージック」に変わっていた。なんかこう、辞書の更新プロセスがあるんでしょな。

「新宿」を「あらじゅく」と読み上げるためには、ここに書かれている「新宿」が地

名であって、しかも川越周辺であるというコンテキストを理解しないといけないわけです。圧倒的な確率で「新宿」は「しんじゅく」と読むわけですから、一次近似として「しんじゅく」になってしまうのは、まあ仕方ないでしょう。しかしですな、そもそも所在地を「川越市新宿」と指定してあって、しかもその天気予報を聞いてるわけだから、そのコンテキストは明らかに「川越市新宿町」であり、これが「しんじゅく」になってしまうということは、そもそも地名辞書を備えてないか、地名辞書を参照するつもりがない実装になっているということでしょう。

でまあ、このクオリティでサイゾーのニュースを読み上げられると、なんかもう胸をかきむしりたくなる状態なわけで、運転してる途中に聞くのは大変危険です。サイ

ゾーさんのコンテキストなんだから「関ジャニ」ぐらいちゃんと読めてほしいよね。なんで「せきじゃに」になるんだろうか。ここから類推するに、そもそも形態素解析してないでしょうし、固有名詞系・地名系の辞書も一切整備するつもりがないんでしょうなあ。そんな装備で大丈夫か、アレクサ。ちなみに「あれ、臭くない？」というところちゃんと反応するのはちょっと可愛い。

メニューというユーザーインターフェース要素は、「今できることの全てはこれだけです」という選択肢の上界をユーザーに対して提示する、という素晴らしい機能を持っています。従って、メニューのラベルに書いてあることを、開発者と同様の視点で理解することができるなら、次に何が●できないか●について悩むことはありません。通常の実装では、できることよりできない

One Point BUZZ WORD

nano pi neo2

最近 nano pi neo2 というシングルボードをちょっと触ってみています。サイズ的には 4cm 角ぐらいで、電源用の microB と通常の USB A ポート、1000base な RJ45、あとはストレージ用の microSDHC ソケットがあるぐらい。メインメモリ 512MB。GB じゃないです。4cm 角という大きいような気がしますが、実際に触ってみると充分小さく感じます。サポートサイトから ubuntu のバイナリイメージを落としてきて、windows 用のツールで microSDHC に書き込み、ソケットにはめて有線 LAN に接続して電源を入れると、あっけないくらいカタンに起動しました。唯一ややこしいのが、外側からぱっと分かる形で mac address が記載されていないこと。二次元バーコードらしきものがあつたので読み取ってみると (data matrix でした)、印字されてる文字列と一緒に、全然 mac address じゃないという ... しかたないので、dhcp サーバ側でクライアントの mac address をメモしておいて、nano pi neo2 を接続後、増

えた mac address を元にログインする、という手順が必要なのがちょっと面倒なところ。でもこれ、とりあえず動くんですよ。邪魔なモニタ出力がなくて、ヘッドレスで動くのが大変良いです。なんかこう、定期的に ping だけ打ってくればよいとか、定期的に温度湿度報告してくればよいとか、そういった用途に大変向いてるんじゃないかと思います。ただ、色々な先人の苦勞を見ると、やっぱりストレージとしての microSD の信頼性のなさがキモになるようです。オンラインでデータを送信するだけならまだしも、何かを記録するという用途にはあまり使えないかもしれません。また、結構熱暴走するのでヒートシンク必須とか書いてあり、真夏の暑い状態で安定して動くかどうかは現時点ではなんとも言えません。そう言えば、その昔設定したサーバのメインメモリ、確か 64MB とかでした。echo といい、なんか数十年巻き戻ってるような感覚の今日この頃です。

このほうが遥かに多いため、できないことの詮索をする必要が無いのは大変便利です。まあ、開発者が意図した機能と、ユーザーが読み取った機能が一致しないことが多々有り、その際は悩むことになるのですが。一方、アイコンというユーザーインターフェース要素は、「これ」という指示代名詞の対象として使えることを意図します。「これ」がなんだかわからなくとも、とにかくマウスなどによって対象として選択することが可能になります。人間のパターン認識能力は大したものですから、同じアイコンが同じものを表しているのであれば、詳細に入り込むことなく「これ」を選ぶことは容易です。さらに、デスクトップというユーザーインターフェース要素は、メニュー同様「世界の果て」をユーザーに対して提示することにより、何を●選べないか●について悩まなくともすむようになってます。つまり、GUIという枠組みは、「できないことを明確化する」という哲学の元にユーザー体験を組み上げているということになります。

さて、で音声入力なんですわ。アレクサは入力を受け付けますが、なにを受け付けないかは、認識させる前にはわかりません。少なくとも一度入力を試してみて、「すみません、お役に立てません」という応答が返ってきたならダメだった、ということユーザーの責任で記憶して置かなければならない、ということです。しかもそのダメ具合が微妙で、発音の仕方が悪くてアレクサが認識できなかったのか、認識はしたけど解釈できなかったのか、認識して解釈したけどデータを入手できなかったのかをアレクサの反応からうかがい知る必要があります。この伝わなくてイライラする感覚、筆者の世代だとあるものを思い出させます。

そう、コマンドベースのアドベンチャーゲームです。

「ポートピア殺人事件」以降（かどうかわかりませんが）、アドベンチャーゲームの主流はメニュー型式になりました。つまり、探索空間はメニューにより制限され、どのメニューをどの順番で実行していくかを探索する（そして、よくできたゲームはその順番に無理がない）のがゲーム性を生み出すこととなります。しかし、それより前の世代のアドベンチャーゲームでは、コマンドを文字列として入力していくユーザーインターフェースでした。これがどれだけややこしいかというと、メニューでは考える必要のなかった「できないこと」の探索にものすごく時間を食われてしまうのです。

かりにテキストオンリーではなく、線画等の多少のグラフィックがあるとして、最初の難関は今見ているものが何かを探索しなければならぬことです。目の前に机っぽいものがあるとして、それをなんと呼ぶか。tableなのか、deskなのか、side tableなのか、dining tableなのか。あるいは単に box だったりとか。これを探し出すだけで一苦勞な状況を想像できるでしょうか。これが GUI ベースであれば、マウスでクリックすることによりそれがなんである、テーブル的な何かを指し示すことができるのに。また、その場面で使える単語の一覧が提示されていれば、そこから選ぶだけなのに。こうして苦勞の末目の前のソレがテーブル系ではなく、bed であることが判明したとして、今度は bed に対してできることを探索しなければなりません。上に乗る？下を覗く？動かしてみる？毛布を剥ぐ？貧弱な絵からは、何ができるかさっぱりわかりませんし、システムが認識する単語が何なのかも試行錯誤しないと判明しま

せん。この何一つわからない状態から探り探りでできることを見出していくことがゲーム性になっているわけですが、そんな状況でストーリーにたどり着くのは、英日辞書と独英辞書と希独辞書を駆使しながらギリシャ語の古典を読むようなもんです。アレクサが提供してくれる環境は、まさにこのイライラ製造装置なのです。現状、アレクサはニュースの再生と BGM 再生にしか使ってないのですが、再生する音楽の指定だけで一苦勞です。どこに地雷があるかわからず、しかもなんか日々微妙に更新されていくため、数日前に地雷だったところが整地されて問題なくなっていることもありますし、逆に今まですんなり認識していたことがいきなりダメになったりします。つまりユーザー側に蓄積したノウハウは短期間で消失してしまうわけで、その意味ではコマンドベースのテキストアドベンチャーの不親切さに加えて、不思議のダンジョンシリーズ（というか、筆者的には rogue なんですが）がもつ「すべてが台無しになる」ゲーム性も加味されていると考えて良いでしょう。この探り探りインターフェースが本当に望むべきものなのかどうかは、ちょっとよく考える必要がありそうです。確かに両手が塞がってる状態でラーメンタイマーを起動するという局面にはぼっちハマるのですが、一言で表せられないような複雑なことを頼もうとすると、ほぼ絶望的です。検索してサマリを返してもらおうようなリクエストに回答できるようになるには、まだまだ時間がかかるでしょう。なにしろ英語っぽい音で LOVE PSYCHEDELICO と指定しない限り、わけわからん曲しか再生されないのですから。

Hiroyasu Sakaguchi
(株) IMAGICA イメージワークス